

古代から近世における石造物の石材利用

—大和とその周辺を中心に—

Use of stone material in stoneworks of ancient to early modern periods:
Yamato and neighbouring area

狭川真一

SAGAWA, Shinichi

大阪大谷大学文学部

(Faculty of Literature, Osaka Ohtani University)

Abstract

Since ancient times, memorial stone objects concerned with Buddhism have proliferated rapidly. The types of stone materials that can be processed have differed in the history according to technological developments. Here I focus on the Kinai area of central Japan, where it is possible to follow the transition over a long period of time.

In the Nara period, tuff, a soft stone material, was used in most of stone objects, and granite, a hard stone material, was used in some stoneworks. Granite products are found at area related to Todaiji Temple (Nara), suggesting that Silla engineers were involved in connection with the Keron Sutra. During the Heian period, soft stone was the main material used, and white tuff, probably from Sanuki district, was especially favoured in Heian-kyo (Kyoto). The Korean masons who were active in the Nara period probably returned to their home country, when the project was completed.

After the Jisho Rebellion, Song stonemasons came to Japan and played an active role under the influence of CHOGEN, who devoted himself to the reconstruction of Todaiji Temple. They remained in Japan after the restoration of Todaiji Temple and left splendid works of art in various places. The construction of Koyasan's milestones (Choishi) in the late 13th century grew to the point where multiple teams produced more than 220 identical stone objects, and after the project was completed, they are believed to have dispersed to various regions and worked in each area. From this point on, until around the 15th century, granite became the main material for Buddhist stoneworks.

Exceptionally, stoneworks made of hard sandstone became the norm at Koyasan. However, in other areas, around the 16th century, sandstone, green schist, andesite and gabbro etc. were added, while granite was the main material. This may have been due to the wide use of local stone materials. The memorial stone objects using Kasuga-yama andesite (Kanambo stone), which is an extremely hard stone, indicate the improvement of technology. In addition, stone objects made of schist also began to appear, taking advantage of its laminar characteristics. In modern times, soft

stone material, Izumi sandstone, became very popular, and the majority of gravestones were made of it. However, many of the gravestones are now noticeably cracked and peeled off due to the rapid weathering of the soft sandstone. On the other hand, after the middle of the 17th century, hard sandstone used at Koyasan disappeared and it was replaced by granite. There are two possibilities that 1) the hard sandstone could no longer be quarried, or 2) it was a choice made by those who were aware of the disadvantages of sandstone.

The historical use of stone materials in memorial stone objects has changed over time, telling us the existence of technical and distributional restrictions at that time.

要旨

古代以来、仏教系の石造物は急増するが、その技術の進展によって加工できる石材の種類も異なっている。長期間にわたってその変遷を追うことができる畿内地域を中心に見ていきたい。

まず奈良時代では軟質石材である凝灰岩の資料が多いが、一部に硬質石材の花崗岩が使用されている。花崗岩製品は東大寺に關係する地点に見出されるので、華嚴經との關係で新羅の技術者が関与しているのではないかと想定している。平安時代は軟質石材が主体を占め、なかでも讃岐産とみられる白色の凝灰岩が平安京を中心に好まれたようである。奈良時代に活躍した渡来石工は事業が完成した時点で本国に戻ってしまったのであろう。

治承の乱の後、東大寺復興に尽力した重源の影響で宋人石工が渡来し活躍する。彼らは東大寺復興後も土着し、各地に見事な作品を残してゆく。彼らの高い技術は花崗岩を身近な石材に押し上げたと言えるだろう。13 世紀後期に行われた高野山町石造営は、220 基余りの同一石塔を複数のチームで製作するまでに成長し、事業終了後は各地に分散してそれぞれの地域で活躍したものとみられる。これ以後、15 世紀頃までは花崗岩が仏教系石造物の中心となる。

こうした中、高野山では町石造営前後から硬質砂岩製の石造物が主流となるが、これは例外的な状況である。他の地域では 16 世紀頃を境にして、花崗岩を中心としながらも砂岩、緑色片岩、安山岩、斑瀾岩などが加わってくる。地元の石材を幅広く活用するようになったためであろうが、春日山安山岩（カナンボ石）はきわめて硬い石材であり、技術の向上が見て取れる。また、片岩系の石材では、その石材の特性を生かした形状の石塔も登場するようになってくる。

近世には和泉砂岩と称する軟質の砂岩が大流行し、墓石の大半はこれを利用したものである。しかし、風化の速度が速く、現代まで残る軟質砂岩製墓石の多くは亀裂が目立ち、剥落するものも少なくない。ところが高野山では、17 世紀の中頃を境に主流であった硬質砂岩が消え、花崗岩へと変化している。硬質砂岩が採取できなくなったためであろうか、あるいは砂岩の欠点を察知していたことによる選択だったのであろうか。

古代以来の石造物の石材利用は時代とともに変化し、その背後に技術的な問題や流通の問題などが存在することを教えてくれる。

1. はじめに

古代から近世の日本において、石造物（主として仏教遺物）に用いられた石材について、その大凡の傾向を把握する。とくに古代の資料となると全国的な広がりを確認することが難しいので、それが分布

する畿内地域、とくに大和地域を中心としたエリアで石材利用の変遷を追いかける。また中世後期以降についても石材利用がかなり細かな範囲で変化することが知られているので、これも上記と同様に大和とその周辺に限定しておく。



第1図 飛鳥地域の亀石



第2図 飛鳥地域の猿石

まず、時代別に石材の変遷を単純に追いかけるが、できるかぎりその当時の歴史的背景を踏まえながら、利用する石材の変化が何に起因するのかについても、言及を試みる。

ただし、すべてに亘って深く追求できているものではなく、今後時間をかけて丁寧に整理してゆく必要があることは言うまでもない。今回はその触り部分の報告ということで、ご了解をお願いしたい。

2. 古代の石造物

2-1. 飛鳥の石造物

飛鳥地域に限定的な分布を示す特殊な石造物がある。亀石（第1図）や猿石（第2図）、酒船石などの石造物で同じものは二つと無く、いずれも独創的な造形物である。猿石は吉備姫王陵墓内に4体が知られるが、猿にも見えるが人物とも見え、立体物の両面に造形されている。その点では橘寺の二面石も共通するが、こちらは顔のみの造形となる。亀石は巨石の一部を加工して亀の顔、手足、甲羅の一部を彫刻するが、全形は自然石を巧みに利用したものである。これらの用途は不明である。これに対して近年発掘調査で確認された亀形石は園地の一部に設置され、他の石と組み合って導水施設となる。甲羅を円形の盆状に彫り込んで水を溜めるものである。なお、この上流に酒船石があり、一連のものとする考えもある（町田ほか，2000；河上・卜部，2001）。ちなみに大阪の四天王寺に残る亀形石も、近年の調査で類似の性格を持つものと判断され、当初の位置を動いていない可能性も出てきた（佐藤・一本ほか〔編〕，2019）。園地に伴う石造物では須弥山石や石人像（道



第3図 鹿谷寺跡十三重石塔

祖神石）があり、噴水として利用されていたと考えられている。

これらの多くは斑状の混入物が目立つ花崗岩製で、地元産出の石材である。硬質石材の加工技術が存在したことを物語るが、限られた短期間での製作とみられ、次に続くものは存在しない。渡来した石工による限定的な受注生産とみるのが妥当ではなかろうか。

2-2. 奈良時代の石造物

仏教的な石造物が各地に造営されるようになる。種別は石塔と石仏（磨崖仏）である。石塔は10基余り知られているがいずれも凝灰岩製で、山寺と思しき遺跡に残されるものが多い（狭川，2021a）。なかでも大阪府太子町鹿谷寺十三重石塔（第3図）は凝灰岩を切り出す際に岩盤を彫り残して製作された珍しいものである。凝灰岩の産出地は奈良盆地南西



第4図 石位寺三尊石仏



第5図 頭塔石仏



第6図 芳山石仏



第7図 御土居出土卒塔婆

部の二上山と奈良市の春日山が中心とみられ、いずれも石切り場が知られている。

石仏は最古と推定される奈良県桜井市石位寺三尊石仏（第4図）で7世紀後半頃。石材は火山礫凝灰岩とされる（辻，2012）が産地は不詳。磨崖仏では同県宇陀市飯降薬師磨崖仏で凝灰岩の露頭に20数体の諸尊像を彫り出す。中央の区画内には二仏並座の中尊と脇侍菩薩4体や僧形像，梵天・帝釈天，八部衆などで構成され，別区には一對の獅子，金剛力士像，四天王像を配置したと推測される。法華経「見宝塔品」を具現化させたものだ（狭川・柳澤，2014）。

その他，春日山中にある地獄谷石窟仏や鹿谷寺磨崖仏（平安以降に下る説〔神田，2023〕あり）など，凝灰岩製のものが目立つ。ただ，笠置寺弥勒立像磨崖仏や頭塔石仏（第5図），芳山二面石仏（第6図），

新薬師寺如来立像石仏は花崗岩製である。詳細な検討を必要とするが，ここに列記した4地点ともに東大寺に係る土地に残されていると考えることができる。東大寺における華嚴経の深まりは新羅の影響下によるものともみられ，韓国慶州にある古代の石仏，磨崖仏に通じるものがあるため，新羅の技術者による限定的で且つ一時的な造営ではないかと考えている。

このように奈良時代は凝灰岩の資料が中心であり，一部に花崗岩製のものも登場するが，一過性のものであり，この時期から国内に花崗岩の加工技術が定着した訳ではない。

2-3. 平安時代の石造物

中期以前では大和に類例がみられないので平安京で探してみる。建築材（基壇外装など）に凝灰岩が



第8図 良源（元三大師）墓笠塔婆

利用されるのは、奈良時代からの傾向であるが、平安宮では白色系の凝灰岩が利用されるようになる。その原産地は讃岐の火山石^{ひやまいし}と呼ばれるものと考えられている。

近年になって出土事例が増し、平安京鳥部野遺跡では六角柱形の軸に笠と宝珠を乗せる笠塔婆風の石塔（石幢とする意見もある）が、方形周溝を有する墳墓遺構に近接して出土した。墳頂ではなく、墳丘前に建てられた可能性も推測され、年代的には11世紀後半に遡る可能性がある（狭川，2019a）。同様の石材を利用した塔婆は御土居遺跡でも出土しており（第7図）、年代の特定は難しいが、梵字を浮き彫りにする珍しい技法を用いている（持田・関広，2017）。また京都府八幡市や奈良県天理市でも類似の事例が報告されており、石塔と墳墓の接近を語るうえで重要な事例が増加している（佐藤・上井，2022）。

ここで注意すべき資料がある。比叡山横川にある高僧の墓所に立つ石塔である。現在は花崗岩製のものが残っているが、いずれも多角柱を呈し簡易な笠が乗っており、鳥部野遺跡で出土したものに形態的な類似性が認められる。ここの墓所に祀られる高僧ら5人の没年は良源の985年から覚超の1034年（景山，1978）、つまり10世紀後期から11世紀前期である。現状では想像の域を出ないが、当初は讃岐製の凝灰岩製であったものが経年劣化したため、中世に入って硬質の花崗岩を用いて旧形を写しつつ再建



第9図 安楽寿院三尊石仏（京都国立博物館蔵）



第10図 於弥阿志神社層塔

されたものではないかと推測している（第8図）。

平安時代前半～中頃に推定される石造物の類例はきわめて少ないが、平安京およびその周辺においては、讃岐産凝灰岩製の資料が主流であったと推測される。

後期に至ると若干だが石造物の事例は増加する。平安京近辺では安楽寿院に残される凝灰岩製の三尊石仏が2組ある。方形石材の表面に如来三尊と地藏三尊（十王像のうち2体）とみられ、これと一具になる阿弥陀三尊石仏が京都国立博物館内に移設されている（第9図）。

大和に目を転じると明日香村於弥阿志神社層塔（第10図）や円成寺十三重石塔など、各所に資料が散見するようになる。また、大阪府河内地域にも凝灰岩製層塔が複数残されており、この時期に該当すると



第11図 当麻北墓五輪塔

みられる。いずれも二上山産凝灰岩が中心となる。また五輪塔も登場し、葛城市当麻北墓鎌田家五輪塔（第11図）や大阪府太子町西方院墓地五輪塔は古い形態を残しており、平安時代後期から新しくみても鎌倉時代前期頃のものである。奈良盆地南部西寄りから二上山を挟んで大阪府河内地域には層塔や五輪塔、さらには重層宝篋印塔などの凝灰岩製品が残されており、注目すべき地域である。

また春日山内にある春日山石窟仏（通称穴仏）も、凝灰岩の露頭を繰り抜いて造営された平安時代後期を代表する磨崖仏（石窟仏）で、東西2窟から成り、西窟に金剛界五仏と四天王2体（第12図）、東窟に地藏群（六地藏？）、観音群（六観音？）と四天王2体、仏塔の塔身部に四仏を刻んでいる。西窟の五仏の像容は先の安楽寿院石仏の像容に作風が似ており、関連する石工の手になるものかも知れない。なお西窟には銘があり、久寿二年（1155）の刻銘があったとされ、保元二年（1156）の墨書名は肉眼では見えにくいが赤外線撮影では明瞭に確認でき、この時期で年代の判明する貴重な事例である（太田，1968；他多数）。

軟質な凝灰岩製ではあるものの、大和や河内を中心として石塔や石仏を造営する機運が高まっていたことが分かる。これらの凝灰岩製資料は鎌倉時代前半期まで造営が続くが、やがて硬質の花崗岩製のものが主流になってくる。



第12図 春日山石窟仏（西窟）



第13図 東大寺南大門石獅子

3. 中世の石造物

治承四年（1180）に勃発した平重衡の乱は、東大寺や興福寺を灰燼に帰したが、その復興の命を受けたのが重源である。重源は勸進僧として大衆から浄財を集めるとともに、後白河法皇や源頼朝などの有力者からも寄付を募り、みごとに東大寺の再建を果たす。

この復興事業で活躍したのが宋から渡来した工人達で、そこには建築技師や鋳物師、石工などが居たようである。なかでも石工は4人の来日が記録され（『東大寺造立供養記』）、その中の一人とみられる伊行末は若き日に来日して定着し、嫡男も石工として活躍。日本に硬質石材加工技術の定着をもたらした。

東大寺復興事業では、渡来した石工らは建造物の基壇などを中心に仕事をしていただが、中国から石材（梅園石）を輸入して製作した作品もある（現



第 14 図 般若寺十三重塔

存するものは東大寺南大門の石造獅子像：第 13 図／山川〔編〕，2012 ほか）。定着後は日本の伝統的な形の塔婆類を造営したようで，奈良市般若寺十三重石塔（第 14 図）や宇陀市大蔵寺十三重石塔がその代表作であり，最晩年の作品として建長四年の東大寺法華堂前石燈籠（第 15 図）が知られる。

東大寺造営で活躍した石工は日本に定着し，各所で活躍の場を見出す。たとえば春日大社の若宮社基壇の修築記事（寛喜四〔1232〕年）に「若宮御前水垣四面壇南北ヲ唐人之作石ニ天，壇カツラヲタ、ミ，壁石ヲ立（以下略）」（『春日社記録一』）と見える。ここに見える「唐人」は，東大寺再建で来日した顔ぶれが含まれていたとみられる。

さて，鎌倉時代は花崗岩製品の定着した時代と言っても過言ではないだろう。例えば，伊行末を頂点とする石工は伊（井・猪）派石工と呼ばれ，嫡男の行吉以降，永和元（1375）年の桜井市日女社石燈籠まで，多くは名前に「行」の字を使って活躍しており，行末直系の子孫の可能性が高い。彼らの作品は奈良・京都・大阪・和歌山をはじめ岡山にも残されている（佐藤，2007 ほか）。

またこの時期は複数の石工集団が活躍していることも知られている。関東地方を中心に活躍する大蔵姓を名乗る集団や奈良・京都を拠点とする橘姓を名乗る集団など，14 世紀後半にかけて石工名を刻む石造物が多く残されてきた（佐藤，2007 ほか）。近畿で活躍するこれらの石工は，ほぼすべて花崗岩を彫



第 15 図 東大寺法華堂前石灯籠



第 16 図 高野山町石

成して作品を仕上げている。

このように各地で花崗岩製石塔が造営されるためには，需要と供給のバランスが保たれなければ成立しない。古代の場合はそこが不安定だったため硬質石材の加工技術は定着しなかったとみられるが，中世の場合，一つの大きなイベントに注意する必要がある。それは高野山の^{ちょういし}町石造営である（第 16 図：愛甲，1973）。町石造営の契機は，それまで木製のもので賄われていたが劣化のたびに再造営する必要があり，永久性の強い石材に一気に交換しようとしたのがこの町石造営である。文永二（1265）年から弘安八（1285）年の 20 年間に実施され，複数の石工集団が高野山に集結し，造営に関与したとみられ



第 17 図 一石五輪塔（高野山奥之院）



第 18 図 石龕仏（称名寺）

る。具体的にどの地域からどういう石工が集まったかは明確ではないものの、それは石塔の形に微細な異なりがあることから指摘できる（狭川，2005；佐藤，2023）。

この事業が終息して以後、石工は各地へ散ってゆくが、それぞれの地域でも木製から石造への変更が行われたり、新規の石塔・石仏が造営されることとなり、大きな広がりを見せるようになるのはすでに指摘したとおりである。

ただ肝心の高野山では初期の頃に一部花崗岩製の石塔が見受けられるが、13世紀後期頃から中世を通じて砂岩製の石塔が主流を占めている。硬質の砂岩であり、現代でも劣化が少ない良質のものであったためであろう。以後、室町時代中期以降になって緑色片岩製の一石五輪塔が造営されるようになり、砂岩製品と並んで大量に生産されている（第17図）。地元でも複数の石工が活躍するようになった証であろう。

なお、中世前半期の資料は一品ずつ発注に対応して作られたものであり、同形同大のものを大量生産したものではない。これらは石工たちの「作品」と呼んでも良い資料であり、石工もそれに名を残してきた。しかし、15世紀に入るとまさに量産される石造物が登場し、各地の墓地で小型の石塔が多くみられるようになる。量産化が始まると自ずと簡素化が進行し、規模も小型化が進んでゆく。まさに「商品」化が進んだと言える（狭川，2021b）。近畿地方の場合、多くは墓地に安置される五輪塔あるいは一石五輪塔がほとんどであるが、奈良盆地では箱仏と称する小型の石龕仏（第18図）が量産されており、16世紀

末頃まで製造が続いている。

これらの量産された石塔や石仏は、その多くが墓標として墓地に安置されたものであるが、奈良町の各所に今も祀られるものは供養塔として造営されたもので、この場所に墓があるわけではない。つまり埋葬は中世都市奈良の外側（縁辺部）に設けられた墓地へ行い、供養のみが町内で行われたのである（狭川，2017a）。このように考えると、墓標とは言えず供養塔とすべきものである。使われる場所によって性格は異なるとみられるが、それらは同じ工房で製作された規格製品であり、用途に応じて使い分けたものとみられる。

ところで、中世後期に増加する石造物は墓石だけではない。大和では春日大社に奉納される石燈籠が永正年間（1504～21）頃から急増する。この時期の石燈籠は花崗岩製で、基礎・竿・中台・火袋・笠に至るまで平面方形の規格品で御間型燈籠と呼ばれ、元亨三（1323）年に遡る資料を最古とするが、春日社本殿と若宮社をつなぐ御間道の両側を中心に近似した形態のものが数多く奉納された（第19図）。以後、燈籠の形式を変化させながらも近現代まで継続して奉納され続けている（狭川，2017b）。

奈良盆地やその周辺地区では、中世末期まで花崗岩の利用が続いており、上記した五輪塔や一石五輪塔、石龕仏は花崗岩製のものがほとんどである。ただし、その産地については複数あるとみられ、分析も進みつつあるが具体的な説明はこれからである。どうあれ、近畿中心部の13世紀から16世紀は花崗岩全盛期と言っても過言ではなからう。



第 19 図 春日大社御間道と御間型石灯籠



第 20 図 舟形五輪塔（カナンボ石と花崗岩, 天理市柳本墓地）



第 21 図 舟形板碑（天理市柳本墓地）



第 22 図 櫛形墓碑（奈良市浄国院）

4. 近世の石造物

奈良盆地や南山城では中世後期から近世前半の移行期に、五輪塔をレリーフで表現した舟形五輪塔（背光五輪塔）が登場する（第 20 図）。これまで立体で造形されていた五輪塔は厚さ 1 cm にも満たないレリーフへと変化する。供養祭祀を行う正面のみを重視したものであり、塔の背面は粗く石材を彫成したままの状態とどまる。

次に登場するのは、シルエットはまったく同じながら表面から五輪塔が消え、輪郭内は法名や年号といった文字だけになった舟形板碑である（第 21 図）。墓石から仏塔が消えた瞬間である。葬送供養にあたり仏塔の功德が忘れられ、戒名と日付重視の考え方に移行したと捉えられている。先の舟形五輪塔は 16 世紀に登場し 17 世紀全般にわたり広がりを持ちながらも 18 世紀には終息するもので、終息が始まった段階で舟形板碑に主役を交代している。これは早くに京都府の木津惣墓で坪井良平氏が地道な調査で導き出された傾向であり、それを受けて元興寺（極

楽坊）で調査を実施した木下密運氏の解釈である（坪井, 1939；木下, 1967）。

この傾向は塔形墓標の消滅として、中世から近世への移行期を象徴する現象であり、墓塔から墓碑に移行したという捉え方もできよう。これ以後、舟形板碑の輪郭が無くなり、舟形五輪塔自体の名残も消え、真の墓標となった。

19 世紀になるとさらに墓碑化は進行し、櫛型墓標が登場する（第 22 図）。墓石の頂部の形状が昔の櫛の形に似ていることから名付けられているが、それがこの形態の源流を示している用語ではない。この墓石の形状に仏教的な色合いは見出せないが、表面には戒名を書き、側面には没年月日を記載する。夫婦で一石の墓碑を製作する事例も多く、この場合は正面に夫婦の戒名が並び、左右の側面にそれぞれの没年月日を記載するものも多い。墓碑の主役が戒名（死者）であり、没年月日は没後に行われる供養祭祀の時期を知るための重要な存在と位置づけられる。

以後、20 世紀に入ると現代でも良く見かける方柱

状の墓碑が登場し、現代に至ると言ってよいだろう。ただ現代はさらに変化の兆しがあり、近い将来方柱型の墓石は消えてしまうであろう。

さて、これらの墓塔や墓碑に利用される石材について、奈良盆地北部と南山城地域について朽木量氏の分析成果をみてみよう。舟形五輪塔を主体とする戦国期から江戸初期にかけては、通称カナンボ石（輝石安山岩製・鉄石）のものが目立つ。これは春日山中に採石地があるとされるもので、この時期に同様の石材を利用した資料を見かける。朽木氏によると、奈良奉行所による春日山の管理強化に伴って、春日山中の伐木等が制限されるという事実があり、春日山への立ち入り制限が強化されたことに伴って、同山中から採石されていたカナンボ石も採石不能となり、利用できなくなったのではないかと結論づけられている（朽木，2004）。时期的にも符号するので妥当な見解として支持したいが、今後は春日山中での採石現場の確認が急がれるところである。

カナンボ石が採取されなくなってくると一時的に花崗岩が復活する地域が多い。舟形五輪塔や舟形墓碑の一部に花崗岩製のものがみられ、櫛形墓標にもそれが散見される。しかし、その時期は短く、やがて砂岩製の墓石が主流を占める。砂岩の流行は南山城の各墓地に限らず、データがある天理市中山念仏寺墓地や新庄町平岡極楽寺墓地でも同様の傾向が指摘されている（白石 [編]，2004）。この砂岩は一般に和泉砂岩と呼ばれているもので、幕末頃にかけて一世を風靡するほどに墓石＝和泉砂岩のような傾向が見出せる。江戸時代中期から末期にかけて石材のシェアを独り占めしたかの感がある。ただ、この和泉砂岩製品は残念ながら石材の劣化が激しく、層状剥離をみせるものが多く、各地の墓所で破損が気になるところである。

しかし、この傾向にはやはり地域差があり、今後は各地で詳細な調査が必要と思われる。たとえば高野山の大名墓として造営される巨大な五輪塔をみると、近世前期における石材は砂岩が主流である。硬質の砂岩で中世以来この地でよく見かけるものと思われるが、17世紀中頃に境に花崗岩に変化し、以後終息するまで花崗岩の石材利用は続く（狭川，2019b）。周辺各地の墓所では和泉砂岩が主流を占め

ているが、その脆さが原因なのか、あるいは和泉砂岩では巨大な石塔を製作しにくかったのかは明らかではないが、何らかの要因で高野山の石材利用の他の地域とは異なったあり方になったものとみられる。

5. おわりに

大和を中心としてその周辺地域を含む石材利用を時代別に追いかけてみた。かなり雑駁なものであるが大凡の傾向は掴めたかと思う。

中世後期の15世紀以降に墓標となる石塔は小型化、量産化、簡略化の傾向をみせながら、各地の墓地で造営されるようになってくる。これは墓石を造営できる階層が低層化し、その分安価で普及しやすいものを求められたことによると推測される。各地で顔ぶれは異なるものの数多くの石塔・石仏が造営されたことは間違いない（狭川 [編]，2020）。このようになると規格化された石塔が巷に共有されるようになり、石工も精力的に大量生産を実施したであろう。石材の供給もおそらく1か所だけでは間に合わず、近隣で新たな石切り場が開拓されていったのではないかと想像するが、中世後期の具体的な石切り場の発見は未だに少ない。今後の課題であろう。

江戸時代中期には和泉砂岩を中心にかなり広域に分布するようであるが、すべてが同じ地点で採石された和泉砂岩なのかどうか、石切り場の確認とともに各地への広がり方も追跡する必要がある。これらの課題については各地で地道なデータの積み上げがなされており、それらの分析結果に期待したい。

なお、明治頃以降は再び花崗岩の墓石が多くなり、近年の傾向はその原産地を外国に求めるようになっていると聞く。その裏側で「墓仕舞い」と称して墓を無くす、墓石を処分する人も急増している。現代はまさにお墓の変革期、次への移行期と言える。さて自分たちの世代は墓石を通じて末永く供養されるのか、墓石の行く末は次世代、次々世代に託されている。

文献

愛甲昇寛（1973）：『高野山町石の研究』。256 ページ、密教文化研究所。

- 太田古朴（1968）：『石仏 柳生街道』。77 ページ，綜芸舎，京都。
- 景山春樹（1978）：『比叡山寺 その構成と諸問題』。386 ページ，同朋舎，京都。
- 河上邦彦・ト部行弘（2001）：『古代大和の石造物』（図録 石の文化）。109 ページ，橿原考古学研究所。
- 神田雅章（2023）：『日本古代磨崖仏の現況と保存に関する基礎的研究』（科学研究費研究成果報告書）。125 ページ。
- 木下密運（1967）：元興寺極楽坊板碑群の調査研究 ―その形式的変遷を中心として―。元興寺仏教民俗資料研究所年報，第1冊，6-32。
- 朽木 量（2004）：『墓標の民族学・考古学』。268 ページ，慶応義塾大学出版会，東京。
- 狭川真一（2005）：嚙合式五輪塔考。日引，第6号，47-61，石造物研究会。
- 狭川真一・柳澤一宏（2014）：飯降薬師磨崖仏の復原。元興寺文化財研究所研究報告 2013，1-22。
- 狭川真一（2017a）：中世都市奈良の宗教環境。『「宗教都市」奈良を考える』，69-93，山川出版社，東京。
- 狭川真一（2017b）：古代・中世の石燈籠 ―奈良市街地東部を中心に―。近畿文化，第814号，4-7。
- 狭川真一（2019a）：六波羅政庁跡、音羽五条坂窯跡（鳥部野関連遺構）出土の石造物と墳墓遺構。『六波羅政庁跡、音羽・五条坂窯跡発掘調査報告書』，60-70，株式会社 文化財サービス。
- 狭川真一（2019b）：高野山奥之院における大名墓研究の課題。『史跡金剛峯寺境内（奥院地区）大名墓総合調査報告書Ⅰ』，84-91，高野町教育委員会。
- 狭川真一〔編〕（2020）：『中世墓の終焉と石造物』。221 ページ，高志書院，東京。
- 狭川真一（2021a）：古代の石造物。日引，第16号，3-16，石造物研究会。
- 狭川真一（2021b）：中近世の石文化 ―作品・商品・材料―。『北陸と世界の考古学』，187-192，日本考古学協会 2021 年度金沢大会実行委員会。
- 佐藤亜聖（2007）：中世的石塔の成立と定着。『墓と葬送の中世』，199-218，高志書院，東京。
- 佐藤亜聖（2023）：『高野山町石実測調査報告書』。129 ページ，高野山町石研究会。
- 佐藤亜聖・一本崇之ほか〔編〕（2019）：『四天王寺亀井堂石造物調査報告書』。82 ページ，和宗総本山 四天王寺，大阪。
- 佐藤亜聖・上井佐妃（2022）：布留遺跡周辺中世開始期の墓制 ―杣之内古墳群（須川）地区火葬墓出土の石造塔婆とその地域性―。『ここまで判った布留遺跡 ―物部氏以前とその後―発表資料集』，185-192，天理市観光協会。
- 白石太一郎〔編〕（2004）：『大和における中・近世墓地の調査』（国立歴史民俗博物館研究報告第111集）。503 ページ，国立歴史民俗博物館。
- 辻 利和（2012）：石位寺三尊石仏。『日本石造物辞典』，736-737，吉川弘文館，東京。
- 坪井良平（1939）：山城木津惣墓墓標の研究。考古学，第10巻第6号，310-346。
- 町田 章ほか（2000）：『あすかの石造物』（飛鳥資料館図録第35冊）。80 ページ，飛鳥資料館。
- 持田 透・関広尚世（2017）：『御土居跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-11）。21 ページ /16 図版，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所，京都。
- 山川 均〔編〕（2012）：『寧波と宋風石造文化』。362 ページ，汲古書院，東京。

